



2020年度ランゲージラウンジ活動報告

著者	西 香織, 鈴木 陽子, コンスタンティネスク チェザル, 大森 洋子, 張 宏波, 李 善姫, 塩谷 祐人
雑誌名	明治学院大学教養教育センター附属研究所年報 : synthesis = The annual report of the MGU Institute for Liberal Arts
巻	2020
ページ	34-39
発行年	2021-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10723/00004126

2020年度ランゲージラウンジ活動報告

教養教育センター ランゲージラウンジ運営委員会

1. 総括

2008年に始まったランゲージラウンジ活動は、まず語学検定試験用の問題等をそろえて学生たちが自律的に学習できる環境をつくることから始まった。現在では、英語とスペイン語はILSSP (Independent Language Study Support Program) を開設し、学習者自らが具体的な目標を設定して、そのゴールに向かって定期的にチューターと面談しながら(英語)、あるいはオンライン学習を用いて(スペイン語)、自律学習実践ができるように支援を行っている。また、それ以外に、言語ごとに曜日・時限を決めて、母語話者との会話実践の場を提供したり、日頃の学習のサポートを行ったりしている。

今年度は新型コロナウイルスの流行により、緊急事態宣言が出るなどしたため、変則的な活動となり、臨機応変な対応が求められた。ほぼ全面的にオンライン授業になる中で、本活動もオンラインによる実施となったが、活動に携わる教員にとっても語学学習のあり方を見直す良い機会となった。

次年度についても、引き続き母語話者との交流の機会を増やし、言語がコミュニケーションの道具であることを実感できるような場を増やすことを目標に、多様な外国語学習の支援活動を行っていききたい。

2. 活動詳細

2.1 英語部門：鈴木陽子

英語部門では、昨年度に引き続き、二種類の自律学習支援プログラムを実施した。一つは、一学期間にわたって自律学習を支援するIndependent Language Study Support Program (ILSSP)、もう一つは、一回のセッションから参加可能なEnglish Clinicである。今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、二つのプログラムは春・秋学期共にWeb会議ツール (Zoom) を用いてオンラインにて実施した。

ILSSPは、本学非常勤講師の山森由美子氏および坂井誠氏を担当者とし、月曜日 (11:00-15:30)、水曜日 (11:00-12:55)、木曜日 (13:00-15:30) に実施した。各学生が設定した目標に沿って教材や学習方法を提案し、ポートフォリオ (学習記録) を活用して、自律的に学習計画や目標が立てられるよう助言を行った。春学期には受け入れ可能な人数を大幅に超える申し込みがあったが、個別指導という性質から、希望する学生全員にプログラムを提供することは叶わなかった。そのため、参加申込書に記入された英語学習の目標を勘案して選抜を行った。各学期の参加者数の詳細は表1の通りである。

表1 ILSSPの実績

	LE	LF	LA	EE	EB	EG	SG	SW	JU	JC	JP	JG	KS	KC	PS	PE	計
春	2	0	0	1	1	1	0	1	0	1	1	1	2	1	3	1	16
秋	1	0	4	1	1	2	1	0	3	0	3	0	1	1	0	2	20

English Clinicは、ILSSPに参加することができなかった学生や英語学習に関するさまざまな質問や悩みを抱える学生に向けたプログラムである。本学非常勤講師のTom Webb氏および田辺玲子氏を担当者とし、春・秋学期共に火曜日と金曜日の昼休みに実施した。各学生が抱える相談内容に応じて、文法や語彙、発音に関する質問に答え、英語の学習方法や留学関係書類の作成について助言を行った。また、英会話やプレゼンテーションの練習ができる機会を提供した。オンライン化に即座に対応するため、春学期は一日の提供数を減らして一回のセッションを40分としたが、秋学期は昨年度と同じく20分で実施した。今年度（12月20日時点）のセッションの予約率は表2の通りである。

表2 English Clinicの実績

	春学期	秋学期	全体
提供数	22	50	72
予約数	22	43	65
予約率	100.0	86.0	90.3

予約率は春・秋学期共に高く維持されており、プログラムに対する学生の関心の高さがうかがえる。また、オンラインになったことで、キャンパスを問わずプログラムを提供することが可能になり、より広いニーズに応えることができた。来年度以降もプログラムの周知に力を入れ、多くの学生に利用してもらえることを期待する。

2.2 ドイツ語部門：コンスタンティネスク チェザル

2020年度ランゲージ・ラウンジ（ドイツ語）はコロナ禍の影響により春学期は開催されず、秋学期から「ドイツ語 de ランチ」と題して、森本康裕氏（本学非常勤講師）が遠隔形式によって行なった。授業時間の変更や昼休み時間の短縮のため、開催日時は毎週月曜と金曜の週二回、それぞれ昼休みの30分間（13：00～13：30）の実施となった。当初はTeamsを利用してのリアルタイム双方向型にて講座を実施したが、途中から月曜にオンデマンド型、金曜に双方向型へという方式に切り替え、流動的な参加が可能となるよう形式に変更した。参加者はドイツ語初級を履修する1年生および中級を履修する2年生の学生だったが、時にはドイツ語未履修者が参加することもあり、本講座はドイツ語だけでなく、ドイツ語圏の文化に関するさまざまな情報を提供する場となった。

教材としては主にYouTubeにアップロードされているドイツ語圏のニュースやアニメーション、あるいはドイツ語学習教材や映像資料を利用し、ドイツ語リスニングや基礎文法項目の解説、重要なフレーズや単語の確認、すでに授業内で学んだ文法事項の復習、典型的なドイツ語の言い回しなどを学習するとともに、現代のドイツの時事的な問題の解説を行なった。

2.3 スペイン語部門：大森洋子

スペイン語では、昨年に引き続きオンラインコースを行なうとともに、Francisco GARZÓN先生を講師に、Tertuliaと名付けて、会話実践の時間も設定した。

自律的な学習をより効果的に行えるオンラインコース、セルバンテス文化センターが開設しているAVE globalは、今年度も利用した。

昨年と比較すると、希望者は多かった。それぞれがDELE受験や将来の留学、さらには一定期間の現地での語学研修を経て、そこで得たスキルの維持等を考えての申し込みが多かった。スカイプでの授業がなくなったことで受講を断念した学生もいたが、最終的に40名弱の学生が一年にわたって受講している。問題は、定期的なチェックをしないと学生が自律的に学習できているかが把握できないこと、また時に学習を促したとしても、一方的な呼びかけであるためなかなか実情を掴めない点である。今後はこの問題の解消のために工夫していく必要がある。

一方、会話スペースは、コロナ禍の影響で春学期は中止とし、秋学期はTeamsを使用して行ったが、昼休みが短縮されて、35分程度のセッションとなった。オンラインであるために、個人のレベルの違いなどで意思疎通が困難だったような印象を受けた。しかしながら、時期にあったスペインのテーマを取り上げて、映像等を使ってスペインについての情報を共有することで、スペイン語圏への興味をかき立て、学習のモチベーションアップにはつながったと言えよう。次年度もオンラインでのスタートとなることも予想されるために、オンラインでのインタラクティブ活動について担当者とも研究を続けて、より活発な活動になるように努力しようと考えている。

Teamsでの開催実現には、教養教育センターの担当者にいろいろとお世話になった。改めて感謝の意を表したい。

2.4 中国語部門：張宏波

2020年度中国語部門「中文会話倶楽部」の活動は、昨年までに引き続いて中国人留学生がスタッフとなって担当した。ただし、コロナウィルスへの対応として、授業と同様にオンラインでの開催となった。春学期と秋学期にそれぞれ12回と26回開催された。

春学期は、毎週木曜日の昼休みに（約60分）実施した。参加者数は各回を通して多く（数名だけの回もあったが）、20名を越えるほどの盛況回も見られた。オンライン授業となって学生同士や教員に直接触れることができないため、授業以外にも触れ合える機会を求めている学生が少なくなかった。参加人数が多いとやはりそれ自体で明るく活発な雰囲気生まれ、楽しみながら学ぶという目的に適う場になりやすいことは、オンライン版の会話倶楽部でも同様だった。オンラインでも留学生主導のスタイルは親しみやすい雰囲気を作る上で重要だった。

また、Zoom上で少人数のグループに分かれて会話する機能は、中上級レベルの会話練習をした、中国人留学生と話したい、発音のチェックをしたいなど、明確な目的を持って参加している学

生には、大変好評だった。対面での開催以上に効果を感じた学生もいた。逆に、希望する相手とグループが組めない場合は不満となった。きめ細かい対応が求められる。

技術面では、オンライン開催が初めてであったことから種々の困難を経験したのも事実である。Zoomの法人契約が成立するまでは、無料版の「40分の壁」で一度中断することになり、それだけでなく短い昼休みの開催の支障となったのは痛かった。また、Zoomの操作に担当教員や留学生が慣れていないこと、参加学生もオンライン・スタイルに不慣れであること、昨年度までの対面での会話倶楽部を経験している学生にはオンライン開催との落差への戸惑いなどもあり、試行錯誤が続いた。ただ、授業を含めたオンラインでの開催は当面継続される可能性があり、またオンライン開催に一定の効果を確認できれば、普段でもオンラインなら参加できる学生がアクセスできるなど、新しい展望が開きうるため、このスタイルの可能性を膨らませたいという思いが多くの参加者から感じられた。この明るい兆しを大事にしたい。

秋学期（ビデオ会議ソフトウェアはTeamsに変更）は授業時間帯の変更があったため昼休みの時間が短くなり、30分だけの開催となった。その代わり、月曜と木曜の週2回の実施とした。それでも、前後に授業が入っている学生は、食事の時間がほとんど取れなくなってしまった。実際に、秋学期の参加者は一転して少なく、当初は10名程度だったが、次第に数名程度に減っていった。30分という時間の短さが参加者減少の小さくない要因といえる。オンライン特有の開始時のもたつきなどがあると、実質20分あまりとなり、参加者にとっては中途半端で得られるものが少ない場になってしまったのではないかと考えている。また、オンライン授業になって授業で課される課題が増え、学生に時間的余裕がなくなっているという状況も何度も耳にした。

そのため、2021年度は開催形式や時間帯の設定を工夫する必要があると考えている。担当留学生たちと今年度の経験・反省を踏まえながら、検討を重ねていきたい。

今後の課題としては、例年行っている「手作り餃子体験」などの国際交流イベントも、こうした状況では開催できず、残念だった。オンラインで代替の取り組みができないか、参加者の要望を聞きながら検討していくことも、今後の課題だと考えている。体験や実践の場を通して中国語学習意欲が刺激される学生がいるのも確かだからである。今後も様々な学びへの通路を用意するよう心掛けていきたい。

もう一つは、春学期にスタッフではない中国人留学生が何人か参加してくれていたが、うまく関わってもらうことができなかったことである。彼らは、日本の学生と中国語を通じて交流したり、日本人学習者との交流を通じて母語について理解を深めたいと考えて参加していた。ただ、オンライン活動のなかでうまくその積極性を活かすことができず、やがて顔を見せなくなったのはとても残念だった。多様な参加者のニーズに応え、既存の取り組みを有機的に結び付けたり、発展させていける準備をしておくことを今後の課題としたい。

2.5 韓国語部門：李善姫

2020年度 韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミン」は、オンライン同時双方向型(Zoom)の形態で、高槿旭先生により毎週水曜日(12:55~13:55)実施された。

また、秋学期には、韓国人留学生がアシスタントになり、「New韓国語ビタミン」を毎週水曜日(12:55~13:35)実施した。

各講座の実施状況は次のとおりである。

1. 韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミン」

参加人数は、春学期は15~32人、秋学期は2~32人が参加し、例年より多くの学生が参加した。担当講師の高槿旭先生から以下のようなことが伝えられた：話す能力の向上を最大の目標とした。具体的な内容と、成果は次のごとくであった。

●学習内容

春学期は主に韓国語圏をめぐる様々な動画を視聴して、日本語圏と韓国語圏の文化の相違点について、話す練習を行った。

秋学期は性格、料理、好きな作品といった身近なテーマを中心に、韓国語で語り合った。

●学生の反応と成果

オンライン授業の導入で、①参加者の増加、②WEB教材の利用、③レベルに応じたグループ練習ができて、良かったと思う。

学生の意見としては、「韓国語でたくさん話せるのが嬉しい」「少人数で話しやすい」「様々な動画を見て、韓国により興味を持てた」という意見が多かった。また、「韓国や韓国語に興味を持っている仲間と交流ができて良かった」という意見もあった。

総括して、ランゲージラウンジに参加することにより、話す能力の向上、韓国語圏の文化や社会をより理解することができ、学習モチベーションアップにつながったと言える。

2. 韓国語ランゲージラウンジ「New韓国語ビタミン」

秋学期にオンライン同時双方向型(Zoom)の形態で韓国人留学生3名がアシスタントになり、毎週水曜日の昼休みにランゲージラウンジを実施した(6回実施)。

参加人数は4~9人で、主に中・上級レベルの学生が参加した。

趣味・文化・ドラマなど、毎回違うテーマで留学生と語り合う時間を設けた。

学生からは、「韓国人留学生たちと話ことができるとてもうれしい」「少人数なので話すチャンスが多くてよかった」「さらに韓国語ができるようになりたい」という意見があり、韓国語ランゲージラウンジが、学生の学習意欲向上へと導くことができたのではないかと考えられる。

2.6 フランス語部門：塩谷祐人

2020年度ランゲージラウンジ（フランス語部門）Pause Caféは、昨年度に引き続き、勝山絵深氏（本学非常勤講師）が行った。新型コロナウイルスの影響により春学期は開催を断念したが、秋学期はオンラインで開催し、54名の登録があった。そのため当初は月曜のみの開催であったが、10月からは月曜日をオンデマンドによるコンテンツの配信、木曜日を学生の質問への回答や小テストやクイズなどに対応するという週に2回の開催とした。

学科を越えてフランス語を学ぶ学生たちが集まり、フランス語の疑問を解決したり、実践的なフランス語を習い覚えたりするだけでなく、フランスの情報が得られるカフェのような場所を設けるために立ち上げたが、オンラインでもその目的に適ったラウンジの運営を心掛けた。例えばコンテンツでは、フランス語の文化を主題としたコラムに加えて、フランス語の勉強のコツを伝えたりフランス語の解説を行ったりした。またコンテンツだけでなくZoomを利用した交流会も行った。今年度は初めての試みだったため試行錯誤しながらの運営であったが、参加した学生の反応から判断すると、今後はZoomによる交流会の回数を増やしてもいいのではないかと思えた。

学生からは留学に関してや、検定試験に関して、あるいは勉強方法に関してなど様々な質問が寄せられ、それらはLMS上の個別指導や掲示板を利用して個別に対応ができた。

実際の参加人数は、学生の授業での負担が大きくなったこともあってか、回が進むにつれて減少する傾向にあった。しかし、それでも20名近くの学生がコンテンツを閲覧し、12月の少ない時でも10名以上の閲覧があった。木曜日の参加人数は回によってばらつきがあるが、参加者ゼロの回は12月15日現在では一度もなく、2名～11名の参加があった。

オンラインによるオンデマンド形式のランゲージ・ラウンジは初の試みであったが、白金キャンパスと横浜キャンパスのどちらの学生も参加できるメリットがあるだけでなく、内容に関しても参加していた学生からは肯定的な意見が寄せられた。一方で回が進むにつれて参加人数が減少していくことや、上級レベルの学生への対応が十分にできなかったことが今後の課題となる。全学部学科、全学年が参加していることもあり、今後は幅広いレベルに対応するために文法的な内容やドリルを充実させたり、コンテンツをレベルごとに分けて配信したりするよう工夫することも考えている。